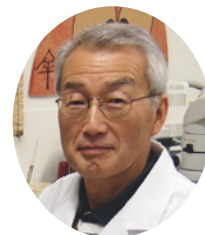


木材利用の試験研究機関に勤務して⑮

～研究願望と転職～

旭川工業高等専門学校 名誉教授 富樫 巖



■2004年8月の日本木材学会年次大会（札幌開催）

日本木材学会の年次大会開催のレギュラー時期は4月でしたが、2004年度は北海道開催で8月になりました。研究発表会場は札幌コンベンションセンター（写真1）、懇親会会場がサッポロファクトリーだったと記憶しています。確か、その前の北海道開催の年次大会は1988年8月、北海道東海大学・旭川キャンパスが会場（研究発表と懇親会、本講座⑭写真2参照）でした。林産試験場の研究職員は両年次大会でスタッフとして大会運営に協力しました。そして、小生にはいずれも人事異動に遭遇した年度でした。



写真 1. 札幌コンベンションセンター（南側外観）

注：札幌コンベンションセンター <https://www.sora-scc.jp/guide/>を引用

スタッフ予算で札幌の開催会場に行けることから、研究発表もしたいと欲張りしました。6年間の普及課業務（普及係と技術係）を取りまとめ、1年前の課員全員の連名で「地方公設試が担う地域・社会貢献活動の一考察」としてポスターでの事例発表を申し込みました。普及課の両系の業務報告的な内容であり、考察や結論をまとめることの難しさから50～60点程度と自己評価していました。一方、K場長からは大会終了後にお褒めの言葉を頂きました。ひとつには「木育」という言葉や取り組みが一般化し始めた頃でもあり、タイムリーだったのかも知れません。

■研究モチベーションの行方

主任研究員として何か新しい取り組みをしたいと考える日々でした。職名に「研究」と付く以上は、何かの研究活動をすべきと思ったものの、具体化できずにいました。各科長以下の仕事を邪魔することなく、彼

らの専門分野の隙間に根を伸ばせるような研究テーマはないものかという守りと攻めが混在した発想です。

また、利用部の予算に予備枠はありましたが、主任研究員用という色はついていません。何をするにも先立つものが不可欠ですから、モチベーションの維持・高揚に難さを感じていました。

■旭川高専の教員募集に気づく

木材学会の年次大会も終わった8月のある日、何かの確認のために長男（制御情報工学科）が通う旭川高専のHPを眺めました。偶然に物質化学工学科・教員募集の見出しに目が行きました。大学と同様にインターネットでも広報していることに興味を感じ、募集内容を開きました。それをキーワードで表現すると、「教授職」、「50歳代」、「生物プロセス工学」、「微生物工学」、「化学工学」、「2005年4月赴任」、「博士の学位」、「技術士の資格」でした。応募書類の締め切りは9月30日、HPへのアップ時期は6月1日になっていました。

大学で工業化学（化学工学含む）を学び、大学院修士課程で微生物プロセス工学の研究室に属し、林産試験場勤務で博士（農学）の学位と技術士（森林部門・林産）の資格を頂いていた小生としては、年齢が多少異なるもののその他の条件が自分自身に当てはまることに驚きました。旭川市内での勤務でもあり、応募だけでも試みることにしました。前任の主任研究員のAさんから、大学教員募集への一般応募はまずは10回以上チャレンジしないと結果に結びつかないとの情報を得ていましたので、合格は期待していませんでした。

必須ではないものの技術士資格が条件に入っていました。この発端としては旭川高専が本科5年コースに加え、1999年4月に専攻科2年コースを設けたことで、7年間学んだ学生（卒業時：22歳）が大学学部卒と同様に学士を取得できる状況になったことです。さらに、本科4-5年生+専攻科1-2年生が技術系大学の学部生と同レベルの教育プログラムで学んでいることのお墨付きを（一社）日本技術者教育認定機構（JABEE）

に求める計画があり、2005年度の初受審を目指していました（イラスト1）。JABEE側の認定条件として、技術的分野の実務を教えらるる教員、または技術士資格を有する教員の在籍が示されていました。



この「JABEE 認定ロゴ」を付したプログラムは JABEE により認定されたプログラムであることを示し、数字はそれぞれの認定年度を示します。

イラスト 1. 世界に通用する技術者教育プログラムに対する JABEE 認定ロゴ

注：（一社）日本技術者教育認定機構「JABEE 認定ロゴ」使用の手引 <https://jabee.org/doc/4105.pdf> を抜粋引用

■総務課長のご配慮に反して

2004年11月に入ってから旭川高専の採用が決まりました。小生の退職は2005年3月末、その時点の年齢が49歳、道職員勤務19年間となります。2004年度から独立行政法人化していた国立高専からの割愛申請はありません。当時の総務課長のKさんから、「勧奨退職制度（50歳以上、20年以上勤務）も使えない。退職金が不利になる。もう1年間、林産試験場に勤務しませんか。林産試験場が嫌ですか？」と聞かれました。ご配慮の言葉に感謝するばかりでした。小生としては熟慮し直すことを即答したものの、決断結果は変わりませんでした。

この世に天国があるはずもなく、林産試験場で働き続ける現実か高専教員として働く現実のどちらかを選ぶかです。長男以外の高専生は知らず、高専教職員には知り合いがいません。全体像がほとんど分からない旭川高専でしたが、50歳を目前にして頂いた新天地に飛び込むチャンスを生かすべきと決断しました。

7年余り後の2012年7月、林産試験場の研究課題検討会の外部有識者を依頼された小生は同試験場の総務部長となっていたKさんと再会し、退職当時のご配慮の言葉に感謝し続けている旨を伝えました。

■採用時のS場長へのお詫び

小生が林産試験場に採用された1986年度は西神楽への移転の時、場長は「移転整備・場長」と称されるSさんでした。小生の採用可否に際し、3回目の転職になることにS場長が難色を示した旨の情報を得て

いました。その難局を打開して採用へと導いてくださったのが当時の林産化学部長のMさんです。

Mさんから、すでに退職していたSさんに対して小生の転職報告をすべきとアドバイスされました。その雰囲気から20年前のMさんの奮闘・苦闘が小生の想像以上であったことを察しました。キノコ栽培担当科出身のSさんでもあり、年賀状交換のお付き合いは継続していました。

小生は転職報告と期待に反したお詫びを手紙に託しました。するとSさんからは、新天地での勤務に対する激励が記された内容の手紙が返ってきました。心が軽くなりました。「飛ぶ鳥、跡を濁さず」です。SさんとMさんに感謝するばかりでした。

普及課への勤務以降、JICA体験があるMさんは、試験研究現場好きの小生に発展途上国でのJICA活動を何回か勧めてくれました。旭川高専退職後にもそのアドバイスに応えず、林産試験場で勤務できたことの恩返しもできていないことを詫言るばかりです。加えて技術士資格の受験はMさんのアドバイスがきっかけであり、それが転職の扉を開ける力になるとは想像できませんでした。

■木のグランドフェアを指揮しない夏

1998年以来、夏となれば「木のグランドフェア」でした。ウッドサマーフェスティバルや親子日曜大工教室&コンクールの準備、運営、後始末に責任者として関わりました。2003年度からオープニングイベントが「木になるフェスティバル」に名称変更および開催期間の変更があり、スタッフ業務が軽減しました。しかし、小生の緊張感やプレッシャーは変わりなく、義務感と責任感で自分を鼓舞した6年間でした。

2000年度頃と思いますが、福祉分野に詳しい技術部職員のAさんからイベントを企画・開催・PRして市民参加を募る場合には、来場者用の車いす準備（タイヤの空気圧点検を見落とし易い）や優先駐車スペースの設置が不可欠であることを教えて頂きました。来場者に対する主催者義務がアップデートし続ける社会常識に目配り・気配りできていない自分を恥じたことを思い出します。正直なところ、当時の小生は来場者用の車いすを配備して置くことの意味を理解できていませんでした。

そして2004年、肩や背中がどこことなく軽く感じた夏でした。（つづく）